研究史

オホーツク文化で出土する遺物として、ほとんどの遺跡で出土している骨製針入れだが最初に学会に知れ渡ったのは、坪井正五郎博士が樺太の鈴谷貝塚で発掘し、発表したのが初めである。鈴谷貝塚では２１本の鳥管骨製の針入れがかたまって見つかり、そのうちの五本は中野氏に譲った。針入れのほとんどに彫刻が施されており、数本以外は絵画彫刻の施されたものであった。素材は鷲の上腕骨である。その後坪井博士はこの鳥管骨を遊戯用具だと考えた（図１）。

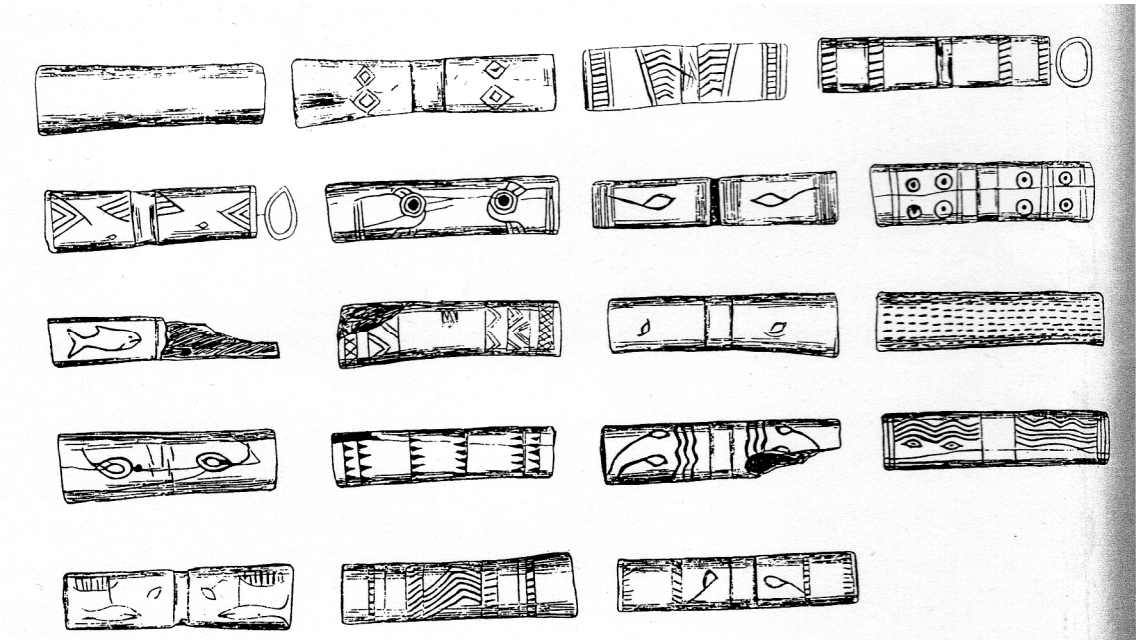
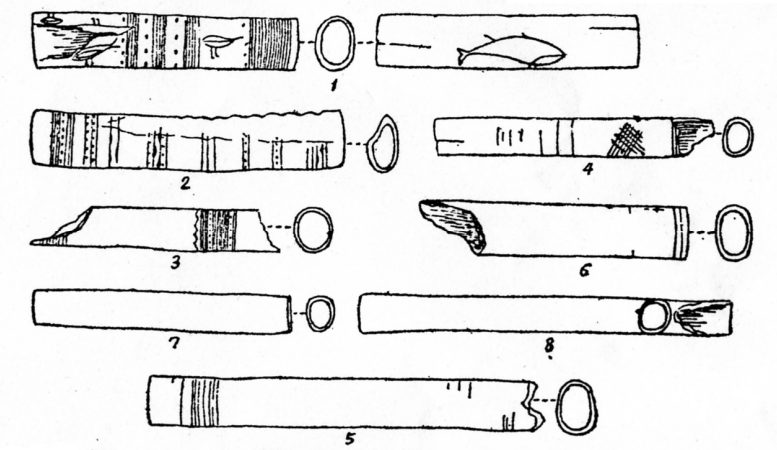


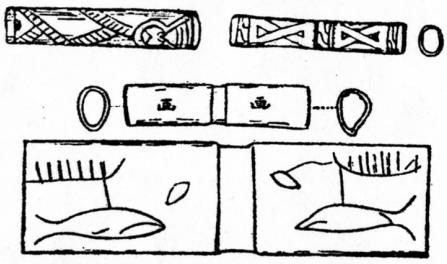
図1　樺太島鈴谷貝塚出

しかし、後に鳥居龍蔵氏は千島アイヌの針入れと似ていることはもちろんのこと北千島アイヌの土俗品に鷲の骨を切ったものを針入れとして使用し、中に狐骨の針を入れてあるのを知り、学界に広めた。鳥居博士の北千島における発見が、特異なものでなかったということは、同博士についで同方面を精査した馬場脩氏の発掘によって証明された。馬場氏は占守島及川第十号竪穴、同島別飛第一号竪穴、同島小泊第六号竪穴、幌延島樺里貝塚から、それぞれ鳥骨管を採集した。同氏によると、及川第十号竪穴から三個出ていずれも彫刻は無かったが、内部に目孔のある骨針が入ったままであった。管の長さはそれぞれ、9センチ、１０センチ、11センチで長いのほど細身である。その中に入っていた骨針の長さは6センチ、5センチ、2.8センチ、ほかの一本は尖端を欠き現在長さ4センチである。この竪穴は大体オホーツク土器時代すなわち千島における第一期の遺跡だとのことである。幌延島樺里貝塚は千島における第三期に属し、ここからは彫刻文を帯びる鳥管骨が出たのであった。樺太ではこの坪井博士の貴重なる発見以外にも、まれに採集することができたらしい。馬場氏によると、同地に永く住まれた木村信六氏がオホーツク式土器を出す本斗郡

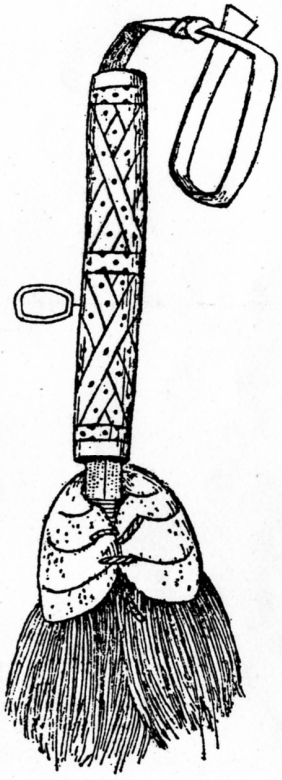
本斗町南浜通二丁目貝塚から、破片を合わせて何個かの鳥骨管を採集したという。その内には精細な幾何学文を彫刻したものもある。ススヤ貝塚と南浜貝塚とのほかからは未発見のようであるが、両貝塚発見品を通じて、長さ 6 センチから 13 センチの間で、最長の 13 センチのものは南浜貝塚出土の彫刻文である。これに入れたと考えられる目孔のある骨針も両所から出て、その長さは 5 センチから 8 センチまでの長さである。両貝塚とも大体オホーツク式土器が主として含まれている（図２）。



根室トーサンボロ貝塚発見骨器（1/2）



（上右）北千島　（上左）釧路　（中下）樺太ススヤ貝塚



北千島アイヌの針入（鳥居博士による）

図2　色々な彫刻の針入れ

その後も北海道道北道東で骨製針入れが多数出土し、網走モヨロ貝塚でも多彩な容姿と彫刻が施された針入れが多数出土し、大場利夫氏によって紹介されている。中には海獣狩猟の絵が彫られたものや鏃のような形をしたものがある。最も珍しいものは先端部を叉状に切断したものがある。彫刻は狩猟絵図のモノを除いて精巧な彫刻が施されている。またこの海獣狩猟絵図が彫刻された針入れは礼文町香深井１（Ａ）遺跡や根室市弁天島遺跡、オンネモト遺跡などでも出土しており、これらのほとんどが大型の舟に乗り 10 人前後の船員と船頭が銛を投げた様子が描かれており、大型の海獣（クジラかイルカ）を日常的に狩猟していたことが想定される。ほかに狩猟図と一緒に海獣も描かれることが多く、ゴンドウクジラであろう海獣が彫られている。根室市トーサンポロ貝塚では両面に絵画が彫られたものがある。トーサンポロ貝塚の管状骨器は弁天島貝塚のものと似てはいるが少々異なる点が注意される（図２）。山浦清・前田潮両氏は針入れについて次のように述べている。針入れは、大形鳥類の脛骨、上腕骨などの管状部分を適当の長さに切断したものを用い、表面にデリケートな線刻による直線、波状、列点などの文様が施され、鯨類、ボートなどの描写が加わる場合がある。北千島アイヌの民族資料の類例が知られている。また出土例では内部に鉄針を収納した状態で残存した例が根室市オンネモトで知られている。近年の報告によると、福井淳一氏が 2008 年北海道考古学研究大会で「骨角器から見た続縄文文化の様相」で触れている。針入れとして間違いないものが浜中２遺跡から出土している。器体には鋸歯状ないし X 状の幾何学文が彫刻される。内部に、極細の骨針が 5 本以上納められている。針入れに分類される資料には、鳥骨を筒状に整形しただがけのものもあるが、基本的に器形に装飾を持ち、長さ 7.5 センチを超えるものと現段階では規定される。骨針は、頭部に特徴があり、縦長の針孔を開けるか、横環する溝を入れて糸掛けとする。また、厚岸町オカレンボーツ貝塚から清野謙次博士等が、鷲の大管状骨を三寸くらいの長さに切り、これに文様を彫刻したものを発見した。ほかに同じく破片も得ている。片面中央にクジラあるいは海獣類が彫られ、他面には平行線と点列の帯状文があり、鳥類が彫られている稀なものが出土している。[1)] 中には針が収納されている例もある。礼文町浜中２遺跡から出土した針入れには中から数本の骨針が出土している。[2)] 根室市オンネモト遺跡からも鉄針が出土されていた。稚内市豊岩７遺跡からも鉄針が収納されたまま出土している。常呂町（現在北見市）ＴＫ７３遺跡でも鉄針が出土している。これらの出土例から鳥骨管製品が針入れだと証明されている。ＴＫ７３遺跡や豊岩７遺跡の鉄針が収納された針入れは細身で針一本分ほど入ればよいほどのものもある。羅臼町のオタフク岩洞窟遺跡では、オホーツク・擦文・アイヌ文化期から針入れが出土した。彫刻が施されていたのは主にアイヌ文化層であったが、出土数が多いのは擦文文化層であった。この層からはオホーツク式土器も出土しており、いわゆる「融合様式」であったと思われる。

様々な針入れ

オホーツク文化に特有な骨角器として針入れがあるがこの針入れにはいくつかの形態や彫刻の種類がある。まずは針入れの時期区分と分布を示しそこから何が示されているのかを見ていくことにする。

１、時期区分

続縄文文化後期―礼文町浜中２遺跡（前１世紀）
鈴谷文化期―稚内市オンコロマナイ貝塚（４～５世紀）
オホーツク文化前期―香深井１（A）遺跡（６～７世紀）
根室市弁天島遺跡（６～７世紀）
オホーツク文化後期―網走市モヨロ貝塚（８世紀）
根室市オンネモト遺跡（８世紀）
トビニタイ文化期―羅臼町オタフク岩洞窟遺跡（１２～１３世紀）
アイヌ文化期―斜里町ガッタンコ貝塚（１３世紀以降）
羅臼町オタフク岩洞窟遺跡（１３世紀以降）
オホーツク文化期（包含層）―根室市トーサムポロ遺跡
稚内市豊岩７遺跡
枝幸町目梨泊遺跡
オホーツク海岸以外―恵山町恵山貝塚
余市町フゴッペ遺跡
豊浦町小幌洞窟遺跡
伊達市有珠モシリ遺跡

などがある。

２、彫刻の種類

彫刻の文様には大きく分けて三種類ある。

① 絵画文様（図３）
② 線刻文様（図３）
③ 無刻文様（製品途中であろうと考えられる）（図３）

①については、弁天島遺跡や香深井遺跡、モヨロ貝塚などから出土していて、いずれも海獣狩猟をしている図になる。弁天島、モヨロ貝塚から出土した針入れには海獣のほかに大型の舟に乗った１０人前後の舟子と船頭が描かれており、銛と索紐も描かれており、海獣にもデフォルトされたものではなく、海獣の特徴をよく捉えており、寄り狩猟ではなく、常習的に海獣狩猟を行っていたことがうかがえる。香深井遺跡から出土した絵画文様の針入れには、ゴンドウクジラだと思われる海獣が描かれており、ゴンドウクジラは 16 世紀に絶滅したそうだ。

②の線刻文様については、出土した遺跡でよく出土され、生活用品だったと思われる。線刻にも数種類あり、横に数条の線刻を入れたのみのものや、香深井遺跡から出土した極めて細かい文様が施された線刻などがある。横に数条の線刻があるものは、主に道北から出土している。逆に道東で見られる彫刻は香深井遺跡のようなきめ細かい文様が刻まれたものが多い。横と縦、斜めなど、規則性のある彫刻が施されている。

③の無刻文様については、製作途中または製作中に破損したものであろう。稀ではあるが端に刻みがあるものがあるが、両端を切断する時にできたキズだと思われる。

そして、①のものに関しては儀礼的な意味合いがあったのではないだろうか。針入れと似た容姿をしてはいるが、これは祭事に使われたものではないかと著者は考える。遠海狩猟を行う前の儀礼として、海獣狩猟を描いたこの資料を用いて、狩猟の成功を祈り大猟を神と結んだのではないだろうか。海の神には針入れ。山の神には牙製婦人像と分けていたのではないだろうか。

文様彫刻について

彫刻の特徴について、ある一定の間隔でほぼ同じ文様が繰り返し刻まれている。一周を一区切りとし、三角形・六角形・平行線、鋸線を基本として、針入れ全体に施線している。また、線刻文様のみの場合は上端、下端のどちらかに数条の線刻が施されている。香深井１（A）遺跡の針入れを例にすると、垂直に切断されている方を下端と考え、縦に二本平行線が彫られ、その横に鋸歯状文があり、また二本の平行線が掘られたあと、何かの模様のように六角形を縦に割ったように鋸歯状文が彫られ、また区切りもつけたように下端の平行線があり、ここから二区にわけ、ほぼ同様な彫刻が施されており、六角形の中に〇のような小さい六角形のようなものが彫られている。また平行線と六角形の隙間を埋めるように二重の三角形が施されている。そして次の二区には前記の二区のように六角形が施されているが、六角形の中に縦長の菱形と次の区には六角形の中に蝶形の三角形が施されており、最後に下端同様に平行線と鋸歯状文が施され、上端には三角形内に平行線が数条施されている。

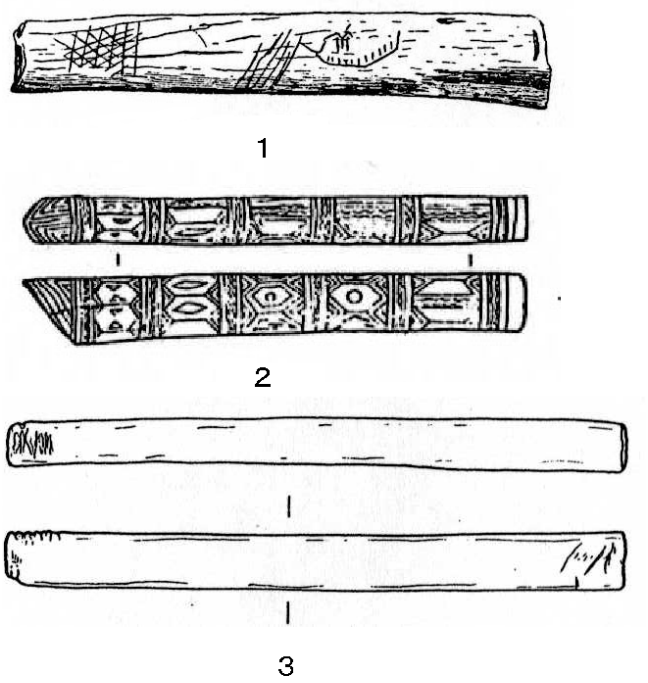
そして、稀なタイプとして、礼文町浜中２遺跡から出土した針入れから一列に列点が施されており、すべて貫通している。

上記の列点のある針入れについて、少し考察する。もし、これが針入れとしたならば、剣山のように穴に刺して使ったのではないだろうか。住居内で針入れを使っていた場合、首にぶら下げるのではなく、棚や机などに置いて作業をしていた。そして、針入れ内には布かそれに近いものを詰め、針を固定していたのだろう。

モヨロ貝塚出土の針入れは口径１～２㎝、長さ１０㎝内外の鳥骨管で自然の空洞を利用して針入としたものである。これは適宜な鳥の脛骨などの管状骨の両端を真直に切断してつくったものと、一端だけを真直に切断し、他の一端を斜めに切断してつくったものとの二種類ものが多いが、稀には一端だけを又状に切ってつくったものも見られる。これらは

いずれも断面は円形または楕円形である。表面は滑沢であり多くの場合は表面に刻線文様を彫刻しており、稀には絵画を彫刻しているものも見られる。なおオホーツク系遺跡出土の針入に彫刻された絵画は、根室弁天島で発見されているが、本遺跡出土品の中にも舟と網を主題としたものが見られる。それによると、舟子が立ち上がって網をひいており、その左端に立ち網らしいものが見られるもので、当時の漁猟の状態を考察する貴重な資料である。なお両端を真直に切断してつくった種類のものでは、一面（表面）にのみ彫刻が見られるが、一端を斜断、一端を真直に切断してつくった種類の箆形のものでは、二面（表裏）とも全面に彫刻がみられる。なお彫刻した文様はきわめて繊細である。これらの事実より推察すれば、本用具は尊重愛用されたものと思われる。

そして、稀なケースとして、オンコロマナイ貝塚のススヤ文化期の墳墓からも出土している。副葬品の中には琥珀玉製のネックレスや針入れ、石鏃などである。針入れのそばに琥珀玉があり、おそらく、針入れとセットで使われていたものであろう。針入れの蓋として使われ、使用痕跡が見られるので間違いはないだろう。



1　モヨロ貝塚出土　絵画彫刻
2　香深井1（A）遺跡出土　線刻彫刻
3　浜中2遺跡出土　無文

図3　各彫刻の種類

絵画彫刻について

香深井遺跡から出土した絵画彫刻のある針入れは上記に示したように、ゴンドウクジラである。ゴンドウクジラは体長 2-3m で、それほど大型ではない。（未完成）おそらく、手ごろのクジラであり、比較的捕鯨しやすかったのかもしれない。

絵画の主な様子は、上記した通り、クジラまたはクジラ類、海獣類、鳥類、大型の舟に乗った、10 人前後の船員と船頭が描かれている。クジラ類は上の通り、ゴンゴウクジラであろう。海原を自由に泳ぐ絵や、ワナにかかろうとしている絵などが多く、舟と一緒に描かれた例では、船頭の投げた銛が命中し、まさに捕鯨された様子が描かれている。舟の絵では、大型の舟で 10 人前後が描かれている。そして、先頭には立ち上がった船頭のような人がいて、索紐や銛が一緒に描かれている。このように、鮮明に海獣狩猟が描かれていることで、オホーツク文化人は常習的に海獣狩猟が行われており、捕鯨も寄りクジラを捕るのではなく、積極的に捕鯨していたのではないかと考えられる。鳥類が描かれた例では、おそらく、アホウドリ類か水鳥ではないかと思われる。[3)] 樺太から千島列島には、白鳥やワシタカ類が分布しており、それらを捕食や交易品として利用したことによる供用として描かれたのではないかと著者は考えている。ことに鳥類に対してもモヨロ貝塚などでヒグマの頭骨を積んだ骨塚のように、鳥類も恩恵を受ける代わりに生活用具に鳥を描き感謝の念を抱いていたのかもしれない。

アホウドリとオホーツク人

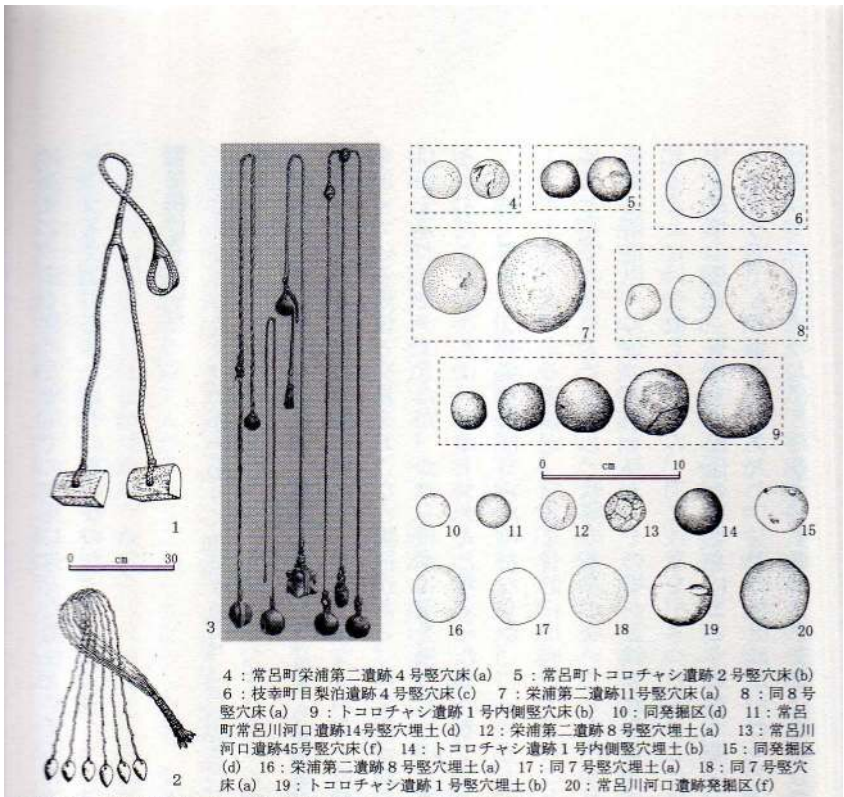
先ほども述べたが、オホーツク文化人にとってアホウドリは食材・日用製品の素材として多く利用されてきた。ではアホウドリは北海道のオホーツク海岸周辺地域で繁殖していたのだろうか。江田真毅氏らは、次のような分析をしている。「比較骨学的方法と古代 DNA 法で浜中２遺跡から出土したアホウドリ科の骨の種同定を試みた。比較骨学的方法では１２点がアホウドリ、残り１１点はコアホウドリもしくはクロアシアホウドリと同定できたようだ。しかし、古代 DNA 法では約半数の試料で同定結果が異なった。古代 DNA は mtDNA のチトクローム b 領域の配列にもとづいて行った。分析に成功した１８試料のうち、６試料では報告されている現生の鳥島のアホウドリと同一の配列が、１２試料ではこの配列と１塩基異なる配列が検出された。後者の配列は尖閣諸島の南小島と北小島のアホウドリで認められた配列と同一であった。これらの配列はコアホウドリとは 3 塩基以上、クロアシアホウドリとは 4 塩基以上離れており、アホウドリのものと同定された。

つまり、形態でコアホウドリもしくはクロアシアホウドリと判別されたすべての骨が、遺伝的にはアホウドリと同定された。この結果の矛盾は 2 つの方法が前提としている形質の進化速度の差に由来すると考えられる。

約１０００年前、礼文島周辺の日本海やオホーツク海にはアホウドリが多数生息していたのであろう。そして、アホウドリの繁殖地があった尖閣諸島や小笠原諸島、伊豆諸島から海路で北海道北部に至るまでに日本海やオホーツク海を北上したことが想定され、これ

らの地域の遺跡から出土するアホウドリ科の骨にアホウドリの骨が含まれることは想像に難しくない。浜名２遺跡から出土したアホウドリ科の骨には食用とするために解体した痕跡の他、上腕骨や尺骨などの針入れなどの道具に加工した痕跡、さらには初烈風羽根を取り外した痕跡が認められる。当時の人々は、アホウドリをこれらさまざまな需要から狩猟していたと考えられる。」としている。

ではなぜ、アホウドリ製の針入れには稀に海獣狩猟の様子が描かれているのだろうか。この絵と同じものが香深井１(A)遺跡から出土した土器からも出土している。例数が極端に少ないが、考察してみる。絵画彫刻の章にも述べたが、この針入れと土器は大型海獣狩猟を行う際に儀礼を行っていたのではないかと考えられる。または、海獣狩猟の後に「送り」として用いられたのかもしれない。絵画彫刻の例数の少なさと、土器にも似たような絵画が描かれていることからも考えられよう。また、鳥類もモヨロ貝塚で出土した土器にも描かれている。アホウドリなのか違う鳥なのかはわからないが、鳥類も信仰の対象だったのではないだろうか。



4：常呂町栄浦第二遺跡４号竪穴床(a)　5：常呂町トコロチャシ遺跡２号竪穴床(b)　6：枝幸町目梨泊遺跡４号竪穴床(c)　7：栄浦第二遺跡11号竪穴床(a)　8：同８号竪穴床(a)　9：トコロチャシ遺跡１号内側竪穴床(b)　10：同発掘区(d)　11：常呂町常呂川河口遺跡14号竪穴埋土(d)　12：栄浦第二遺跡８号竪穴埋土(a)　13：常呂川河口遺跡45号竪穴床(f)　14：トコロチャシ遺跡１号内側竪穴埋土(b)　15：同発掘区(d)　16：栄浦第二遺跡８号竪穴埋土(a)　17：同７号竪穴埋土(a)　18：同７号竪穴床(a)　19：トコロチャシ遺跡１号竪穴埋土(b)　20：常呂川河口遺跡発掘区(f)

図4オホーツク文化の石弾と民族誌のボーラ（玉つき投げ縄）
1：南米アイマラ族の鳥用小型ボーラ（オズワルト1983『食料獲得の技術誌』法政大学出版局）
2：北米タレウミュート族の水鳥用ボーラ（同上）
3：南米パタゴニアのボーラ（八幡一郎1960『図説世界文化史大系1』角川書店）
4～20：オホーツク文化の石弾

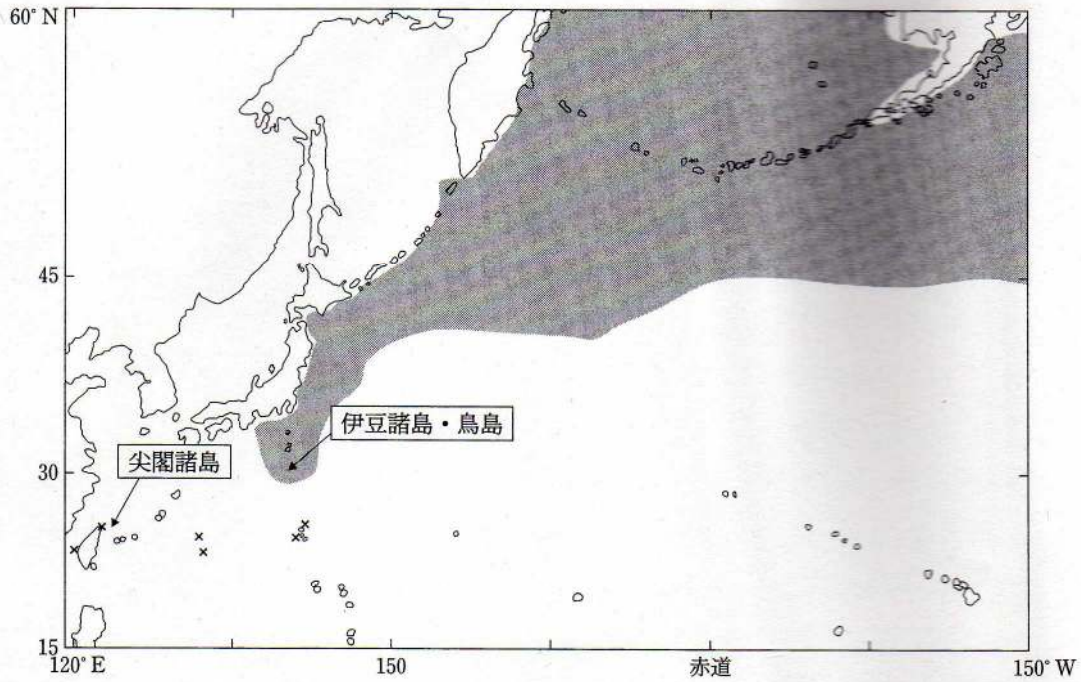


図5　アホウドリの繁殖地(鳥島と尖閣諸島)と衛星追跡データによる非繁殖期の分布域(灰色部)(Hasegawa & DeGange 1982，Tickell 2000，尾崎 2007をもとに描く)。×は19世紀末までのアホウドリが繁殖していた島嶼。非繁殖期の分布域は衛星追跡の観測点の最外郭をおおまかに結んだもの。

	素材	長さ(mm)	層位	出土遺跡	遺跡別No.	備考
N0.1	アホウドリ上腕骨	97	魚骨ブロック	目梨泊遺跡(1994)	2	
N0.2	鳥管骨	66	魚骨ブロック	豊岩7遺跡(1986)	16	
N0.3	鳥管骨	46	魚骨ブロック	豊岩7遺跡(1986)	17	鉄製針混入
N0.4	アホウドリ中手骨	106	魚骨ブロック	浜中2遺跡(1992)	27	
N0.5	アホウドリ尺骨	77.8	貝層ブロック	弁天島遺跡(2003)	53	
N0.6	アホウドリ尺骨	86.8	貝層ブロック	弁天島遺跡(2003)	54	
N0.7	アホウドリ類上腕骨	58	魚骨ブロック	浜中2遺跡(2002)	53	
N0.8	アホウドリ類上腕骨	64	魚骨ブロック	浜中2遺跡(2002)	54	ほぼ等間隔に一列に9穴の小孔
N0.9	アホウドリ類上腕骨	56	魚骨ブロック	浜中2遺跡(2002)	55	
N0.10	鳥管骨	133	表土ブロック	マタワッカ貝塚(1978)	9	報告書の記載に誤差ありか
N0.11	鳥管骨	46	表土ブロック	マタワッカ貝塚(1978)	10	
N0.12	鷲又は白鳥の脛骨	106	?	オンネモト遺跡(1974)	12	ボートと人物、銛を表したと考えられる線刻あり。
N0.13	アホウドリ上腕骨	73	黒褐色砂ブロック	香深井遺跡(1976)	3961	
N0.14	アホウドリ	97	黒褐色砂ブロック	香深井遺跡(1976)	2667	
N0.15	アホウドリ上腕骨	113	黒褐色砂ブロック	香深井遺跡(1976)	2326	
N0.16	鳥骨	45	黒褐色砂ブロック	香深井遺跡(1976)	15155	
N0.17	アホウドリ尺骨	108	魚骨ブロック	香深井遺跡(1976)	1927	
N0.18	アホウドリ尺骨	90	魚骨ブロック	香深井遺跡(1976)	2427	
N0.19	アホウドリ上腕骨	87	魚骨Ⅱブロック	香深井遺跡(1976)	1559	
N0.20	アホウドリ上腕骨	80	魚骨Ⅱブロック	香深井遺跡(1976)	2991	
N0.21	アホウドリ上腕骨	107	魚骨Ⅱブロック	香深井遺跡(1976)	2515	
N0.22	鳥骨	31	魚骨Ⅱブロック	香深井遺跡(1976)	3064	
N0.23	アホウドリ上腕骨	114	魚骨Ⅱブロック	香深井遺跡(1976)	2972	
N0.24	アホウドリ上腕骨	106	魚骨Ⅱブロック	香深井遺跡(1976)	1559	
N0.25	鳥骨	86	魚骨Ⅱブロック	香深井遺跡(1976)	2952	
N0.26	アホウドリ上腕骨	128	魚骨Ⅲブロック	香深井遺跡(1976)	2595	
N0.27	鹿骨	151	魚骨Ⅲブロック	香深井遺跡(1976)	5916	
N0.28	アホウドリ尺骨	119	魚骨Ⅲブロック	香深井遺跡(1976)	2597	
N0.29	鳥尺骨	82	1号ち竪穴床面	香深井遺跡(1976)	5904	
N0.30	鳥骨	76	魚骨Ⅲブロック	香深井遺跡(1976)	4985	
N0.31	ミズナキドリ尺骨	80	魚骨Ⅲブロック	香深井遺跡(1976)	2470	未詳品と報告書では記述してあったがおそらく針入れ
N0.32	アホウドリ上腕骨	98	1号ち竪穴床面	香深井遺跡(1976)	9014	
N0.33	アホウドリ上腕骨	57.1	?	浜中2遺跡(2000)	12551	
N0.34	アホウドリ上腕骨	21	?	浜中2遺跡(2000)	151	
N0.35	アホウドリ上腕骨	177.3	?	浜中2遺跡(2000)	6037	
N0.36	アホウドリ上腕骨	171.4	?	浜中2遺跡(2000)	6038	
N0.37	アホウドリ上腕骨	95.1	?	浜中2遺跡(2000)	20133	内部に少なくとも5本の針が収納されている
N0.38	アホウドリ上腕骨	103.4	?	浜中2遺跡(2000)	6893	
N0.39	アホウドリ尺骨	38.1	?	浜中2遺跡(2000)	4461	擦切られた端部付近を中心に赤色顔料の付着個所あり
N0.40	アホウドリ上腕骨	48	?	浜中2遺跡(2000)	12126	
N0.41	アホウドリ上腕骨	84.8	?	浜中2遺跡(2000)	7732	
N0.42	アホウドリ上腕骨	186.9	?	浜中2遺跡(2000)	10951	
N0.43	アホウドリ上腕骨	50.8	不明	浜中2遺跡(2001)	2212	
N0.44	アホウドリ大腿骨	80	墳墓4	オンコロマナイ貝塚(1973)	1	
N0.45	アホウドリ大腿骨	72	墳墓5	オンコロマナイ貝塚(1973)	2	装飾品と思われる琥珀球と接した状態で出土
N0.46	アホウドリ大腿骨	70	墳墓6	オンコロマナイ貝塚(1973)	4	
N0.47	鳥骨管	146	貝層Ⅰブロック	オンコロマナイ貝塚(1973)	20	
N0.48	アホウドリ上腕骨	56	黒褐色砂ブロック	オンコロマナイ貝塚(1973)	8	
N0.49	アホウドリ尺骨	107	?	オタフク岩洞窟遺跡(1991)	31	アホウドリの尺骨の切断品
N0.50	アホウドリ尺骨	105.6	?	オタフク岩洞窟遺跡(1991)	32	アホウドリの尺骨の切断品
N0.51	アホウドリ尺骨	126.6	?	オタフク岩洞窟遺跡(1991)	33	アホウドリの尺骨の切断品
N0.52	アホウドリ上腕骨	149	?	オタフク岩洞窟遺跡(1991)	34	アホウドリの上腕骨の切断品
N0.53	アホウドリ上腕骨	149	?	オタフク岩洞窟遺跡(1991)	35	アホウドリの上腕骨の切断品
N0.54	アホウドリ上腕骨	123.3	?	オタフク岩洞窟遺跡(1991)	36	アホウドリの上腕骨の切断品
N0.55	アホウドリ尺骨	124.1	?	オタフク岩洞窟遺跡(1991)	37	アホウドリの尺骨の切断品
N0.56	アホウドリ尺骨	124.7	?	オタフク岩洞窟遺跡(1991)	38	アホウドリの尺骨の切断品
N0.57	アホウドリ尺骨	108.2	?	オタフク岩洞窟遺跡(1991)	39	アホウドリの尺骨の切断品
N0.58	アホウドリ尺骨?	62.8	?	オタフク岩洞窟遺跡(1991)	40	
N0.59	鳥骨	75.3	?	オタフク岩洞窟遺跡(1991)	76	一端に線刻あり。大型の鳥の上腕骨または脛骨製品
N0.60	鳥骨	106.6	?	オタフク岩洞窟遺跡(1991)	77	線刻がなく、未製品かもしれない。
N0.61	鳥骨	27.8	?	オタフク岩洞窟遺跡(1991)	78	大型の鳥の四肢骨製品
N0.62	鳥骨	32.3	?	オタフク岩洞窟遺跡(1991)	79	中型の鳥(ウ類)の上腕骨製品。横の線刻のみ。
N0.63	鳥骨	58.2	?	オタフク岩洞窟遺跡(1991)	80	大型の鳥の四肢骨製、文様なし。全面よく摩耗。
N0.64	アホウドリ上腕骨	65.1	?	オタフク岩洞窟遺跡(1991)	168	全面に線刻が施されている。焼けて灰色を呈している。
N0.65	ガン?尺骨	130.4	?	オタフク岩洞窟遺跡(1991)	169	上・下端欠損。

注釈

1）この鳥類が描かれた針入れはほかに香深井１（A）遺跡や鈴谷貝塚からも出土している。

2）この遺跡から出土した針入れは続縄文文化期のものである。

3）{（ワシタカ）の羽は粛慎羽として、利用されていたことがわかっている。アホウドリに関しても、尖閣諸島や伊豆諸島から飛来したようだ。}

4）『アイヌの歴史』の P150~156

参考文献

網走市教育委員会 2009『［網走市］史跡最寄貝塚　―平成１５～２０年度史跡最寄貝塚史跡等・登録記念物保存修理事業発掘調査報告書―』

天野哲也 1975「オホーツク文化における動物儀礼の問題」『北大史学』

天野哲也 2005「ススヤ文化の葬制について」『海と考古学』

天野哲也 2008『古代の海洋民　オホーツク人の世界』

内山幸子 2006「オホーツク文化の動物儀礼」『北海道考古学』42

江田真毅 2009「遺跡から出土した骨による過去の鳥類の分布復原」『鳥の自然史』

大井晴男 1982『シンポジウム　オホーツク文化の諸問題』

大場利夫 1955「モヨロ貝塚出土の骨角器」『北方文化研究報告』10

大場利夫・大井晴男編 1973『オンコロマナイ貝塚』

大場利夫・大井晴男編 1976『香深井遺跡』上

大場利夫 1955「モヨロ貝塚出土の骨角器」『北方文化研究報告』10

菊池俊彦 2009『オホーツクの古代史』

児玉作左衛門 1948『モヨロ貝塚』

角達之助 2004「[研究ノート]オホーツク文化の動物意匠遺物についての一考察」『北方島文化研究』2

瀬川拓郎 2007『アイヌの歴史　海と宝のノドマ』

坪井正五郎 1908「カラフト石器時代遺跡発見の鳥骨管」『京人類学雑誌』23-263

坪井正五郎 1908「カラフト石器時代遺跡発見の鳥骨管(承前)『京人類学雑誌』23-264

鳥居龍蔵 1919「考古学民族学研究―千島アイヌ」『東京大学理科大学紀要』42

新岡武彦・宇田川洋 1992『サハリン南部の考古資料』

西本豊弘編 2000「浜中２跡発掘調査報告書」『国立歴史民俗博物館研究報告』85,特定研究アイヌ文化の成立過程について

西本豊弘編 2003「根室市弁天島遺跡発掘調査報告書」『国立歴史民俗博物館研究報告』107,特定研究アイヌ文化の成立過程についてⅡ

根室市教育委員会 1974『オンネモト遺跡』

北地文化研究会 1979「根室市弁天島西貝塚竪穴調査報告」『北海道考古学』15

福井淳一 2008「骨角器からみた続縄文文化の様相」『2008 年　北海道考古学会研究大会「続縄文文化とは何か」』

前田潮・山浦清編 2002「礼文島浜中２遺跡第２～４次発掘調査報告」『筑波大学先史学・考古学研究』13

柳澤清一 2008『北方考古学の新地平 ： 北海道島・環オホーツク海域における編年体系の見直し』

八幡一郎 1943「骨製針入」『古代文化』14-8

米村喜男衛 1969『モヨロ貝塚　古代北方文化の発見』

米村衛 2004『北辺の海の民　モヨロ貝塚』
羅臼町教育委員会 1991『オタフク岩遺跡(第Ⅰ地点・第Ⅱ地点・洞窟)』
利尻町教育委員会 1974『亦稚貝塚』
利尻富士町教育委員会 1995『利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書』
礼文町教育委員会 1992『北海道礼文町浜中 2 遺跡の発掘調査』
稚内市教育委員会 1986『豊岩 5 遺跡・豊岩 7 遺跡』